

第56回通常総会・第81回講演大会記事

昭和46年度第81回講演大会は、東京大手町の経団連会館で4月6日、7日、8日の3日間開催された。この大会では学術講演会、討論会ならびに第56回通常総会、特別講演会、表彰式、懇親会、ジュニアパーティーが行なわれ、全国より多数会員の参加により盛会をきわめた。

第81回講演大会 4月6日、7日、8日の3日間にわたり243件の講演が専門別7会場に分かれて行なわれた。また、以上のほか下記6テーマによる討論会が行なわれ活発な討論が行なわれた。

1. 焼結ペレットの高温性状
2. LD転炉内の精錬反応
3. 圧延計測
4. 再結晶および薄板の集合組織
5. 鉄および非鉄 BCC 金属の格子欠陥
6. 金属製錬と分析との接点シンポジウム (金属学会と共催)

第56回通常総会 第56回通常総会は4月6日午後1時より経団連会館11階国際会議場において開かれた。田畑専務理事司会のもと初めの的場会長より次のような挨拶があった。



挨拶をされる的場会長

『多数の先輩ならびに会員諸兄の御臨席のもとに、日本鉄鋼協会第56回通常総会を開催するに当りまして、一言御挨拶を申し上げます。

日本鉄鋼協会は、歴代会長の御指導のもとと会員各位の御協力と事務局諸君の努力によりまして、社会の要請に応え、常に新しいビジョンを描いて時代に即した活動を展開して参りましたことは、皆様御承知の通りであります。たまたま私は昭和45および46年度の会長の重責を負っておるものでありますが、過去の輝かしい歴史を思うとき、密かに顧みて果してその任務を全うしうるやをおそれるものであります。先輩各位、会員諸兄の御指導御鞭撻を切に願う次第であります。

昨年度におきましては、例年の行事の他に、稀れにみる大規模な「鉄鋼科学技術国際会議」を東京において開催致しました。これは、佐野・藤本の二代にわたる会長ならびに故湯川組織委員長の御指導と、関係各位の周到

な企画に基くものでありまして、国の内外から多数の論文が提出せられ、参加者も国内国外あわせて1100余名に達し、さいわいにして非常に高い評価のうちに終了することができました。これはわが国における鉄鋼に関する科学技術の水準が然らしめたものでありまして、会員の皆様の御力の賜物であり、また当協会としての組織力、運営能力を世界に示し得たものとして御同慶にたえません。

日本の鉄鋼業界は、近年驚異的な発展を遂げまして、世界の注目を集めておりますことは、今更申すまでもないことではありますが、これと表裏一体に在るべき当協会と致しましても、本来の使命たる学術的研鑽の成果をもつて、鉄鋼業界に貢献するとともに、国際的に活動を展開することは当然のことであり、また意義深きものと存じます。

この点につきましては、先づ第一に、国内の優秀な論文を、できるだけ早く、できるだけ多く、国外に紹介普及させることが急務でありまして、これに関連致しまして然るべき方策を講じたいと考えております。けだし言語の障壁のために、わが国の優秀な論文が諸外国の学界において十分正当に評価されていない事例が余りにも多いのであります。

次に、同様な意味において、国際間の研究発表ならびに討議のために、各種の規模をもつて、相手国やテーマを選んで、シンポジウムを開催することが望ましいと存じます。この線に沿って、本年度に予定されておりますのは5月東京において開催する日本・スウェーデン冶金シンポジウムがあり、またこの秋にモスクワで開催される第三回日ソ冶金物理化学シンポジウムなどがあります。また、当協会が共催または協賛するいくつかの国際会議の企画もあるのでありまして、当協会と致しましては能うる限り前向きに協力致したい所存であります。幸に会員諸兄におかれましても御協力下さいますよう御願い申し上げます。

また、「東南アジア鉄鋼協会」が東南アジア6カ国を対象とし、わが国および豪州が後援参加して結成発足致しましたことは、東南アジアにおける鉄鋼技術の普及の上において誠に意義深いものと存じます。今後の順調な発展を期待するものであります。

その他、鉄鋼に関する学術・技術の交流と相互国間の友好関係を深めるために、あるいは友好使節団を交換しまた年次大会に相互に論文を提出し、できうれば出席して、諸外国の学者、技術者に直接接し、討論し、面識を得ることは、極めて意義深くまた重要なことと存じます。これらにつきましても私共はできるだけ前向きに対処致したいと考えております。

世界の粗鋼生産量は1970年において6億tに迫りました。将来さらに増加することが予想せられております。しかし、その半面、現存の生産技術体系に一種の「かげり」現象が現われ始めていることは覆うべくもありません。例えばエネルギーの問題であり、また環境保全の問題などであります。いずれも将来の鉄鋼生産技術

体系に重大な影響を及ぼす可能性をはらむ問題であります。

われわれとしては、広い視野に立つて、学術的にはその基礎を十分に解明し、また現実の問題としては、現在技術との関連調和を慎重に考慮しながら万全の対策を確立する責務を負うものと思っております。

由来わが国の鉄鋼業は、その主体となる技術のすべてを外国技術に求め、その消化と改善により今日を得たのであります。しかし現在直面するエネルギーの問題や環境保全の問題などは、世界共通の問題であり、その解決については、今やわれわれは諸外国と同じ出発点にならび立っております。前途は世界のすべての国にとって未踏の領域であります。今こそ私共はこの未踏の域への技術開発力について、その真価を問われつつあるのであります。

今後、世界経済の発展に伴って、社会環境の変化もいよいよ烈しさを加えて行くであります。これに関連して、国土・海洋の開発、都市の再開発、それに伴う災害防止の問題、あるいは交通・輸送・通信体系の変化など、新しい社会における人間生活の向上を目標として、益々高度な、しかも広範囲にわたる総合的な技術が要求せられることは明かでありませぬ。

それらの情勢の下にありましても、鉄鋼はなお主力資材たるの地位を確保すべきであると考えられます。しかし、それには、鉄鋼の各種性能がさらに一層高められること、また新たなる用途に対応しうること、そしてまた常に合理的価値をもつて必要に応じて十分に供給し得られることが前提となるのでありませぬ。

それらに関連する基礎理論の解明と、それらを実際技術へ適用する道を開くことこそは、当協会の重要な使命であります。われわれは徒らに先入観念にとらわれることなく、謙虚に心を開いて、関連科学技術の動向に注目しつつ、常に先見的視野をもつてこれに立ち向わなければならないと存じます。産業技術の発達は人間の福祉に矛盾するものではなく、矛盾させてはならないのであります。

ここで重要と思われまことは、技術教育の問題であります。今日の鉄鋼技術は極めて広汎なものでありまして、もとより一人の人間の能力をもつてその全般に通曉することは全く不可能であります。また一般科学の急速な進歩は、敏感に鉄鋼技術に反映して、刻々に変貌してゆくことはさげられません。教育は、学校におけるものと企業におけるものを通じて、当然この情勢に適応すべき人を創り上げるものでなければなりません。現在の技術を教えることを欠くことは勿論できませんが、さらに一層重要なことは情勢の変化に対応して、常に新しい問題を解決する能力、さらに一歩進めて関係科学技術の進歩を織り込んだ新しい技術を組織する能力こそが要求されるのであります。その意味で従来の学校教育における学科別は次第に影薄きものとなりつつあるのを思うのであります。

また、科学技術の発達は当然多くの情報を提供致すのでありませぬが、その中から必要にして適切な情報を抽出することは容易なことではなく、しかも極めて重要なことでもあります。

さらに、また、一般工業技術が広汎なものとなり、い

よいよ複雑なものとなる一方分化して行く傾向の中においては、可能な限り器材をあるいは方法を規格することは、製造技術上においても使用技術の面からも当然なべき重要課題であります。

当協会におきましては、御承知の通り、早くから各種の重要事項につきまして多くの委員会や研究会、分科会などを組織し、それぞれ学界ならびに業界の衆知を集めて、今日までにすでに多くの成果を挙げて参りました。これら既存の研究会などの活動は今後も一層精力的に継続すべきことはもとよりであります。同時に、唯今までに申上げました鉄鋼業におけるエネルギーの問題、環境保全の問題、教育の問題、情報処理の問題、規格の問題などにつきましても、あるものはすでに分科会あるいは委員会の活動を始めており、あるものはその準備段階にあるものもありますが、従来の分科会あるいは研究委員会などと同様に今後次第に力を注いで行かなければならないと存じます。

以上とほしき知識をもつて当協会の任務のいくつかについて申上げましたが、会員各位におかれましても、当協会としてあるべき姿について忌憚のない所見を協会当局に御申出頂きたいと存じます。私共は、何等かの変化が近い将来に予感せられる鉄鋼技術に対し、相携えて支援的あるいは指導的役割を果したいものと念願しております。

先輩各位、会員諸兄の御健康を祈つて御挨拶と致します。』

ついで議事に入り、理事、監事ならびに評議員選挙が行なわれた。別室において開票をしている間に昭和45年度事業報告、収支決算および財産目録の件ならびに昭和46年度事業計画ならびに収支予算の件を一括議題に供して審議に入り、鍵和田理事より次のような事業報告がなされた。



事業報告をされる鍵和田理事

『昭和45年度事業報告および昭和46年度事業計画について特筆すべき点をご報告申し上げます。

日本鉄鋼協会は年々社会の変化に即した企画を行ない新しい発展を続けておりますが、特に国際化時代に対処するため、国際会議の開催ならびに国際交流に関して活発な活動を展開しております。

昨年9月「鉄鋼科学技術国際会議」を開催し、この成功によつて当協会は一躍世界の注目を浴びることになりました。

日本鉄鋼業の飛躍的發展を背景にし、世界の主要製鉄国との国際交流に道を開いたことは誠に意義深いことと存じます。

さらに10月には、国際標準化機構 (ISO) 鉄鋼材料委員会 (TC17) の二つの下部委員会である SC4 (熱処理鋼) および SC12 (熱延・冷延鋼板など) が東京で開催され、大きな成果を収めました。

国際化時代に積極的な活躍を展開するために、今後とも参加国ならびにテーマを選定して意義ある各種国際会議の開催を計画致しております。

日・ソ製鋼物理化学シンポジウムは2年ごとにソ連および日本で交互に開催され、日ソ間の学术交流に果す役割は極めて大きいものがあります。第3回目が、本年10月モスクワで開催されることが決っており、10~11名の使節団を本会より派遣することに予定致しております。

また、本年5月にはスウェーデンよりエケトルブ教授を中心とする使節団が来日し、日本・スウェーデン冶金シンポジウムが開催される予定であり、さらに本年9月下旬には、スカンジナビア国に対して20名程度の鉄鋼使節団を派遣する予定であります。

さらに1973年6月には、第4回真空冶金国際会議を東京経団連会館で開催すべく準備を進めております。

また、東南アジア諸国の鉄鋼業の振興發達を図るため日本が中心になつて設立した東南アジア鉄鋼協会に対して、積局的な協力体制を固めております。

さらに世界鉄鋼業全体の繁榮に貢献するため發足した国際鉄鋼協会の技術委員会に協力するため、当協会に国際鉄鋼技術委員会を設立しておりますが、製鉄・製鋼関係の調査を行なつて国際協調に貢献致しております。

次に、原子力時代に対処すべく發足した原子力部会は5つの専門小委員会での検討もかなりまとまり、今後は実験研究に待つところが多く、45年度には通産省の補助金を受けてシャフト炉による直接還元の研究を実施し、多大の成果を収めました。また、1年間の検討結果に基づき46年度には高温熱交換器と還元ガス製造の共同研究することが決定致しております。なお45年には、政府の原子力委員会で高温ガス炉開発の問題が審議され、当協会も原研とともに協力体制を維持しております。また45年9月には新たにシステム小委員会を設置して総合的検討ならびに開発スケジュールなどの審議を開始しており、原子力部会の今後の進路に果す役割は非常に大きいものがあります。

また、鉄鋼業の高度成長の裏に公害対策が、これまで遅れていたことは、誠に残念なことで当協会としましては、各委員会、研究会のそれぞれの分野で公害対策を取り上げることにしておりますが、特に排煙脱硫に関する技術的検討を行うため45年12月に排煙脱硫試験委員会を設置し、焼結炉よりの排ガス脱硫の共同実験を鉄鋼各社で行うべく検討を重ねております。

また、鉄鋼製造プロセスの将来の姿をさぐるため發足した連続製鋼研究委員会は金材技研で実施している三槽型連続製鋼実験に対し、技術的協力を行なつております。操業技術面においてかなりの進展を示し、今後は連続製鋼炉の各槽における脱炭、脱磷などのデータ収集を含めた実験を続行する予定で大きな成果が期待されております。

次に、来るべき情報化時代に備えるため、当協会と致しましては、鉄鋼技術情報専門センター(仮称)の設立構想を検討しており、その構想の具体的性格を明らかにすべく研究を進めております。科学技術情報が増加し、その流通経路が複雑化し、さらにコンピューター利用技術が進歩する新しい時代に対処するため、この構想は誠に意義深いものと存じます。

また、標準化の問題は鉄鋼業において技術的にも経済的にも意義深いものであり、国際的にも重要な課題となつており、各常置分科会および委員会において規格の統一、JIS原案作成などの作業を進めております。

次に、当協会は共同研究体制の建て直しを強力に推進する方針を固めております。共同研究会メンバーの刷新や運営方法の再検討などを行ない、原料炭節減対策、公害対策など真剣に取り組まねばならない問題を取りあげ実効を挙げる体制が組み立てられて来ております。

さらに金属学会、学振と共同で運営している鉄鋼基礎共同研究会では、新しい運営方針による運営が軌道にのり当研究会發足以来活動を続けてきた部会が、その活動成果をまとめるとともに「遅れ破壊部会」および「再結晶部会」が新設され、活発な活動を開始しました。また46年度からは「凝固部会」「固体質量分析部会」を發足させることとなり、情勢の変化に応じて部会の改廃、新設に柔軟性をもつた運営を行ない、その成果が大いに期待されます。

また、当協会は従来研究委員会の下部機構の教育問題小委員会において教育問題を討議して参りましたが、この程新たに教育委員会を設置し、新しいビジョンで鉄鋼技術者の教育問題と取組むことになりました。

さらに「たたら製鉄法復元計画委員会」における成果は、日本における古代製鉄法を後世に伝えるという意義深いものであり、記録映画をも含めてその事業は国際的にも高い評価を受けております。

この他、会誌の発行、図書編集刊行、鉄鋼標準試料委員会、試験高炉委員会、クリープ委員会、鉄鋼二次製品調査委員会、材料研究準備委員会、資料委員会、ジェットエンジン用耐熱合金研究委員会、シャフト炉小委員会、講演大会、見学会、講習会など、それぞれの委員会において意義ある企画がなされ、活発な活動が展開されており、詳細は昭和45年度事業報告、昭和46年度事業計画をご参照いただきたいと思います。

日本の社会は、最近大きく変動しており、今後はこれまでの環境がそのままではまるかどうか疑問なほどの転換期を迎えております。科学技術の發展は、今後宇宙開発、海洋開発など世界の研究開発に主導されて、急速に進み、国土開発の面では情報システムの変革、輸送革命、原子力利用、住宅建設、都市開発などの新たな展開によつて社会環境は大きく変化するものと考えられます。したがって当協会においては、広い分野の専門家を集めて適切なプロジェクトを策定し、新しい社会の要求する高度の技術的要求に応じられる体制を確立する必要を痛感致しております。新しいビジョンをもつて、その時代その時代の最先端に行く魅力ある協会に盛り上げるよう会員諸賢のご尽力をお願いする次第であります。』

ひきつづき池上理事より、昭和45年度決算、剰余金処分、財産目録、別途資金合計、補助金事業など会計な

らびにその昭和46年度予算が別紙1318ページによつて報告がなされた。

以上報告のあと河西監事より監査報告がなされ、各議案とも満場一致をもつて可決された。

続いて先に行なわれた理事、監事ならびに評議員の選挙結果がまとめ、鎌木、長島両選挙管理委員より理事改選19名、監事改選1名、評議員改選122名の各候補者全員が選挙の結果絶対多数をもつて当選された旨の報告があつた。ここで一旦総会は休憩に入つたが、その間同会場において臨時理事会が開かれ、副会長2名ならびに専務理事の互選が行なわれた。その結果副会長に長谷川(正義)理事、吉崎理事、専務理事に田畑理事が選任され総会は終了した。

名誉会員推挙式 総会に続き、名誉会員の推挙式が行なわれた。新名誉会員は次の通りである。

新名誉会員の略歴は口絵参照)

藤本一郎君、Charles B. Baker 君、Lucien Coche君、Morris Cohen 君、Angel Cervini 君



名誉会員推挙状を受け取られる川崎製鉄(株)藤本社長

感謝状贈呈式 引続いて本会共同研究会の幹事長として長年にわたり共同研究の発展に尽された山岡武氏が昨年12月退任され、氏に対して感謝状が贈呈された。



感謝状を受け取られる山岡前幹事長

表彰式 感謝状贈呈式に続き下記受賞者の表彰が行なわれ、表彰状ならびに賞牌、賞金が授与された。

(表彰理由1289ページ参照)

服部賞	野田郁君	武尾敬之助君
香村賞	土居襄君	宮下格之助君
俵論文賞	成田貴一君	田村今男君
〃	森隆資君	牧正志君
〃	谷口政行君	波戸浩君
〃	藤田春彦君	
〃	丸橋茂昭君	
渡辺三郎賞	作田裕宣君	三好栄次也
渡辺義介賞	林達夫君	
渡辺義介記念賞	青木宏一君	小倉静逸君
〃	小倉隆夫君	甲斐幹君
〃	岸田寿夫君	熊井浩君
〃	小沼敬祐君	清水政治君
〃	菅原節男君	徳山忠臣君
〃	樋口正昭君	肥後実男君
〃	細木繁郎君	松浦実君
〃	宮下幸好君	
西山賞	作井誠太君	
西山記念賞	氏家信久君	大谷正康君
〃	小塚寿吉君	高橋愛和君
〃	時実正治君	中山義隆君
〃	耳野亨君	森田善一郎君
〃	行俊照夫君	横井信君

浅田長平記念資金受領式 表彰式に続き(株)神戸製鋼所(故)浅田前会長を記念し、(株)神戸製鋼所外島社長(代理杉沢専務取締役)より本会に記念資金3千万円の寄贈された。これに対しの場合会長より謝辞がのべられた。

特別講演会 4月6日午後3時より、松下理事司会のもとに下記諸氏による特別講演が行なわれた。

1. 電気製鋼の現状と将来
渡辺義介賞受賞 林 達夫君
2. 鉄鋼の高速変形
西山賞受賞 作井 誠太君
3. 原子力エネルギーの製鉄プロセスへの利用
原子力部会長 藤木 俊三君

懇親会 4月6日午後6時より学士会館本館において日本金属学会と合同で開かれた。

会は長老先輩、表彰者諸氏を迎え、出席者250名を越す盛況を呈した。

長谷川日本鉄鋼協会新副会長司会のもと、今井日本金属学会前会長、的場日本鉄鋼協会会長、佐野日本金属学会新会長の挨拶に始まり、本会を機に各地から参集した会員諸氏の間で歓談がくりひろげられ、互に親交を深め和気あいあいのうちに午後7時半散会した。

ジュニアパーティー ジュニアパーティーは、昨秋の講演大会から、若手技術者・研究者を中心に、技術上、研究上、の問題などについて自由に討論や放談をし親睦を図ることを目的に開催されましたが、その第2回が4月7日午後6時より催された。会員参加者80名を越し明るい雰囲気の中に午後8時散会した。